大正十一年二月二日第三種郵便物認可大正十二年十月十九日印刷納本大正十二年十月二十日發行（毎月一回一日發行）第二卷十號

眞生

第二卷　十月號

□宗教は知つた丈けではいけない。知つたことが信仰とまでならねばならない。宗教に於ては少くとも知るといふことが信とまでならねばならない。

□而て信が又信で止まるものではない。信ずるといふことは又行といふところまで來なければ止まぬものである。信が行とまでならない位では信がまだ眞の信ではないのである。

□乍然行にも信がなければならない。行のみあつて信なきは眞の行ではない、信なき行は人まねである。信なき人まねは眞實の行ではない。

□けれども世間には不思議にもかうした種類の人々が多い、殊に宗教の信仰に於て然りである。吾人は毎日の行事をどんな心で見てゐるのであらうか。

□如何なる場合にも麗しきを變へざることを誓ひ奉るとは我が辨榮上人の如來への御誓ひであつた。そうして私共も朝夕佛前で之をやつてゐる。

□乍然幾人かこの誓ひを我がものとして誓つてゐる人があらうか幾人か誓ひを守つてゐる人があらうか。

□念佛も亦同じである。知つたらば信じ、信じたらば申す。その申すところに眞實の信仰がある。（念）

目次

◆悉くが救はれてゐる
◆人格主義的淨土教　土屋觀道
◆懺悔錄（十七）　演阿彌
◆土屋觀道兄に寄す　金子白夢
◆吾朋便り、震災に就て、

○『至心に信樂して念佛せよ、すれば必ず淨土へ率きとる』と御勅命を戴いたと云てる人が、一つも念佛申さずぞよ』と御勅命が什うの恁うのと理屈を列べてゐる、勅命と云ふ事は只管に信奉して其儘を享け遣つてこそ意味をなすのである。念佛して信仰を得られるやら、それが眞の宗敎やら、そんな事を彼れ此れ云て居らずに聞いた儘、命せられた儘をやつて見るのが勅命である。そこに勅命の權威があり、命じた者の尊嚴があり、受履する者の至純さがある。

○分化と復雜の間には統一と單純とが常に必要とされる、論議と解信の中には旦直仰が又なくてはならぬ救ふと聞い て直ちに其聲の中へ飛び込み得る人は百萬の言辭を積んで信の味を知らぬ者より勝る、信の一點はそこに無限の强さと大とを持つてゐる。

○イエスも『爾等信仰薄き者よ』と常に嘆じ、『芥子粒ほどの信あらば』と云つてゐる、光の速度よりも想像の力は遙かに大である、而かも信の世界は更らに廣大である、信ずる者の深さは其外筵をすら窺ふ事も出來ぬ、信を嗤ふ者は自らの賤を嘲ふ者である、不測の底を神秘といふ神秘の世界に華し自らを愧めてゐる、宗敎は神秘の淵に根を下し知の世界に華は信を以て入る、

○信の世界を忘れて上半身を取たのが宗敎哲學の圈界でそれは宗敎の生命を知らぬ、花も實も根の中に藏せられてゐる事を知らぬ、知を得るは易く信を得るは本當に難い、知は信を伴て事實となり、事實ありて初めて信あり知がある

○先哲を亡じ經を燒き佛をなみしても吾信はあり宗敎はある、拭ひ消す事の出來ぬ佛は終に嚴然として存す、無限の生命無邊の光明として不滅である、一切のものは其中に含まれて生きてゐる、其聲は念佛である本當に念佛し得る者は世界に於て一番確かで一番强いもの、一つである。（尅）

悉くが救はれてゐる

△救はれて居らぬ者は一人も無い。

△手に一錢も持たない者が什うぞお惠み下さいと金を乞ふ樣に、救はれて居らぬ者が、どうぞお救ひ下さいと乞ふのではない、それは乞食の態度である。救はねば佛が壞はれる、神が死ぬ、彼等は救ふ可き使命に生きてゐる、輝いてゐる。吾等が救はれてゐるからこそ彼等も活きてゐるのである。

△救はれて居らぬと思てゐる者があるのなら、その者こそ救はれてゐるのである。救はれてゐると誇てゐる者があるのなら、その者こそ却て救はれて居らぬのである、救はれて居らぬと云ふのは救ひたくないからと云ふのぢやない、救てやりたいから、こそ救てやらぬと云はれるのだ。それでは佛は詐つきか。

△お前等は一人も殘らず救はれてゐるのだと云はれる聲が、どうしても自分の耳にはそうと受取れぬ。常に救はれて居らぬ、佛は救はぬ者だとより考へられぬ。救はれて居らぬと云ふのは救ひを知らぬ迄の誤算である、生來の盲人が色彩の世界を信せぬ樣なものだ。

△佛の瑠璃光明は十方の世界に光被し、充滿してゐる、それを盲の兒はみな見れぬ事に由ての救ひを疑つてゐる、甚だしいのは知見を開かして呉れぬ佛を呪てゐる、或は呪ひたい佛をも持て居らぬ、佛や救ひなんぞ問題にする償値もないと捨て乍ら、然かも救ひの中に溫まつてゐる。地獄も餓飢も佛自らも救ひの大光明中に輝いてゐる、浮いてゐる一切を攝して平等である。

△それでは、そんなに總てが救はれてゐるのなら、今から救はうと骨折る必要もないではないか、又救はれ樣と努める事も要らぬではないか、讃歎歡喜と感謝で充たされて居れば足ると、そうだ、救ひは完成されてゐる、救ふ必要も救はれる必要もない、然し二人とも是れを享樂して居るのでは、乞食が惠み主を讃へ旦那が施しを自慢して居ると同じである。

△救ひはそんな品物でない、概念でない、光明はそんな耽溺を許す甘味でない。救ひの當體は救はれて居る救はれて居らぬなどと、默戯れをも許さぬ眞劍である、靈化であり向上で放恣や沈滯や退嬰でなく健康と積極の將致である。

△それでは救の事實に如何にして接するか『念佛申さん心の起るとき即ち攝取不捨の光明にあずかるなり』眞實の祈りに徹する時、佛凡救不の事實も了々として透徹すそれ迄は救濟論も無神論も總別二願も議論の議論である、一切の戯論を排して救ひそのものに生きねばならぬ。（尅）

人格主義的淨土教（二）

往生思想に就て

土屋觀道

吾人は今斬く往生の思想に就てそが如何に人格主義的淨土教として展開し來たかを考案して見たいと思ふ。世には往生といふことを最も消極的悲觀主義に解決し非現實的に又非社會的にさへ考へるやうになつたと云ふことは吾人の最も遺憾とする所でめる、然に往生といふことは如來の淨土に往て生れると云ふことであつて、所謂迷妄なる罪惡生死の世界を捨てゝ如來中心の慈光の生活に新生するの靈的更生の生活を云ふのである。尤も往生と云ふ言葉は必ずしも彌陀の淨土には限らない、如何なる所にも此上以外の他方土に往いて生れることでさへあればやはり往生といつても差支はない、乍然往生といふことは死ぬるといふことでは毛頭ないのである。然に世人が往々人の死んだことを往生したとか、或は事業に失敗して取り返しのつかぬ時に之では往生だとか、いふことはもとより佛教で云ふところの往生の意義ではない。

而も佛教は前回にも云つたやうに最も積極的な人格主義であり、何處までも如來中心の理想主義であるからして生きると云ふことも亦生れると云ふことも初めより生死解脫の靈界に生れることをいふのであつて其の實は罪惡生死の世界を去つて宇宙の本源たる無爲涅泥の世界に生れることを云ふのである。故に佛教では淨土以外の世界に生れることは之を生死流轉といひ、現在以下の生活狀態に墮落することを決して往生とはいはないのである。尙淨土といふ言葉も淸淨國土といふ意味であれは諸佛の國土とも云へ淨土ともいひ、そこへ生れるを往生といふことも決して惡いことではない、乍然今こゝに云ふところの往生とは人類生活の根本歸結として表はれたる阿彌陀佛國への往生である。

乍然こゝに前以つて承知すべきは古來淨土といひ往生といふことが如何なる意味に說かれ、又如何なる意味に解せられて來たかといふことは一見之を知るに甚た容易なるが如くにして其實は最も難解な問題である。何となれば其の依る所の經典は同じ經典であつてもその同じ經典が其の見る人の見方によつて其の見解を異にすることがあるからである、之を嚴密に云へは同一の經典でも同じ人でありながら其の經典の意味を二樣にも三樣にも解すれば解せられる時之を何れの見方に解すべきかは重大問匙であらう。又前には甲の如くに解せるものも后には之を非として乙の如くに解せなければならない時があつたりすることがあるを以てすれば況や時代を異にし人を異にする等の關係より同一經典にも之に對する經典の解釋が自から其の說を異にすることがあるといふことは自から故意に之を異にするのではないけれとも其の時代の脊景や其の人の個性の異なる所より、其の解說をも異にするに至るものであるといふことは又止むを得ぬ所である。從てこの往生といふ思想の如きも之を史實の上に詳しく反省し考案し來る

時自から此傾向の著しく變遷し來れることを發見するに難くはない。而かも其の思想系統の變遷狀態も之を佛教思想の正き發達の方面より見るのと之を變態的墮落想の方面より見るのとは大いに其の趣きを異にするものがある。

而て此の見解の相違が如何にして來るかを見るに未だ佛教の何者たるを知らざる人々によつて外見からなる勝手な見解より來るものはもとより言ふにも足らないけれども、中には眞實に道を求め行を修するの人に於ても、其の人の時代境遇とに依つては同じ傳統的師子相承と云ひ乍らも自から其の見解を異にするものである。而て之が各宗各派の各分立する所以であつて又止を得ない所である。

乍然若し一度かゝる時代に於て自分が其の信仰の何れに立つべきかを定むるには最も重大なる注意を要する問題となるのであつて、其の宗教に對する信仰の是非曲直は直に其の人の終生を貫く人生の是非曲直を表はすものとなるのである。されば自ら求むる信仰も強き要求なくしては反つて誤まられたる貪慾の宗務に終ることあり、或は己が底級なる知識と私慾とに打任かせて下劣愚盲の宗教に墮することがある。これ吾人極力宗教の正態正素の淨土教を信俸しやうとする所以である。

然は最も正しき意味の往生思想とは如何なるものであるか、吾人は先づ此の問題より明かにし而て之が果して人格的のものなるかを觀察すべきである。而も吾人はできる丈け之を釋尊の經典に求め、併せて宗祖法然上人の法語を中心として我等の信ぜらるべき方向に一切を解釋して見たいと思ふ。

それに就て先づ第一に吾人の心に浮ぶ所のものは淨土と阿彌陀と念佛であり、之を總括して云ふならば『吾人が念佛して(方法)、彌陀(本尊)の淨土(目的他)に往生する』といふことである。而して此のことを淨土教では所求の淨土、所歸の彌陀、去行の念佛といはれてあるが、それは現代的に云ふならば所謂宗教の目的の本尊と方法との問題となる。而て此の目的に達せんとする心の定め方を淨土教では之を安心といひ、之に總して此の土を壓ふて淨土を願ひ求むる心を總安心といひ別して至心に如來を信樂して正しく淨土に往生せんとの心を起すを別安心と云ふのである。而て此の心を以つて念佛して淨土に生まれることを往生といふのである。然に此の往生といふことに就て世人は多くその根本より誤解してゐる人が少くない。而て世に異安心問題などと云ふものゝやかましく云はるゝも要するに此の往生思想の扱方即ち此の安心問題の意見の相違より起つて來る問題である。而て此の往生の思想に就て凡そ古來より大別して三つの異なれる見解がある。而て其の一は所謂世間の佛教々理を知らない人々の出鱈目なる外から見たる考へである。其の二は所謂淨土教徒ならざる聖道家よりの觀察である。而て其の三は即ち淨土教を信ずる人々よりの見解である。而も此の各々が又各々の見解を異にして其の主張を主張するものであれば更らに多くの異なれる見解を見るのである。乍然今日の處之等を一々列擧することは到底吾人の力の及ぶ所でもなく、又其の必要もないことであれば今は只其の大体に止めておく。而て往生とは之を平くいへば往生淨土といふことであつて、又壓離穢土欣求淨土(總安心)といふ事より來るものである

而て穢離穢土とはいやな娑婆界をイトイ捨てるといふことで欣求淨土とは彌陀の淨土を欣ひ求むるといふことであるが要するに往生したいと云ふ心の起る姿である。而て其の淨土たるや彌陀の淨土であつて經典の示す所によれば昔法藏菩薩といふ一菩薩が在つて一切衆生の苦難を見かねて之等の苦難を救ふべく世自在王佛のみ許に詣でて二百一十億の諸佛の國土から其の意に適する最善最良の淨國土を選擇し五劫の思惟長歳永劫の修行の結果として玆に大悲中心の淨國土は建設せられ、其の國土に生するものは自然に念佛念法念僧の聲を聞き無爲涅泥の境に達しやがて等正覺を成じては彌陀同体の佛ともなるといふにある。而て其の往生の方法は何等自力の修行を要せず偏へに如來の大悲本願を信じて彼の國に生ずべく如來の御名を稱へてすがればよいといふのである。而て其の謂ふ所をきけば自ら聖道門的自力解脫の修行のできない者はすべからく此の淨土他力の念佛に歸すべし阿彌陀佛は偏へにそれの爲めの成佛であるといふのである而て淨土教の史實の上には此の思想の未だ盛んでない以前に於ては所謂聖道門的自力修行の法門が盛んであつた、然して其の思想の盛んな時代には未だ他力淨土の法門は盛大たることはできなかつた、たとい淨土教が盛大を來すに至つても未だ淨土教を以つて聖道門の上位におくといふことは無かつたやうである。否それよりもやはり聖道門は淨土門より一段上かのやうに一般には解せられ只だ衆生の機根が聖道門の修行に相應ずることができないからで若しその修行のできる人ならば聖道門に入るに越したことはないといふ考へ方であつた。故に若し此の聖道淨土の二門を並べて其の何れに依るかと云ふならば其の機根さへ堪ね得るならば淨土門より聖道門をとることが正しくして且つ尊い事かにせられたのである。

されば淨土教徒が聖道門に對する態度は其の教法の如何を誹謗するものではなくして只之に相應すべき機根に於て吾人は聖道門の修行には應じきれないからといふ一點にあつたといはねばならぬ。尤も今日の淨土教徒の中には更らに進んで聖道門では其の機を選ぶけれども淨土門では貴賤賢愚を論せず貧富老弱を問はないから寧ろ民主的、普遍的平等的であり、博愛的であつて、社會共存の眞義にも叶ふものであるとの理由をも考へるやうにはなつた。乍然從來の佛教では其の發達の順序並に教義成立の狀態より云ふも世人の多くは聖道門を以て佛教の正態正系とし、釋尊自らの宗教とし生活として之を主張し、淨土門を以て之に堪ねない下根の人々をして往生せしむる傍系かの如くに見なして來たのである。從て聖道門を以て此土入聖といつて此の世に於て戒定慧の三學を嚴修して宇宙の大道に合一し、佛凡一体の妙境に到達して妙覺果滿の佛陀となることを期する聖者の宗教とし、淨土門を以て彼土往生といつて之等の修行に堪ねざるものが罪惡生死の身ながらに彌陀の本願他力に信賴して死後彌陀佛國に往生して悟を開く凡夫の宗教としたのである。

從て聖道門は聖者の行くべき宗教であり、淨土は凡夫の行くべき宗教となつたので、自ら人格を尊重し自ら向上を求むる人には一見聖道門を捨てゝ淨土門を選ぶのは聖道門を行く人に對して氣が引けるや

うな感じもするのである。殊に自らを高しとする人々に於てさうである。茲に於て佛敎には自ら聖道淨土の二門あり、自力他力の二敎あり、此土彼土の二世界があることゝなつたのである。而て若吾人にして其の機根に堪ねうるならば吾人は聖道門的自力の修行によつて此土に於て正覺を得るを最上となし、若し然らざるものは淨土門的他力の救濟によつて彼の土に往生して正覺を得べしといふことになるのであるが。而も之が從來の佛敎の見方であり立宗敎判の立方であつた、乍然尙此の聖淨二門の關係自力他力の問題、此土彼土の見方に於て吾人は如何に之を見るべきか、古來幾多の先哲古聖の所說を聽くに吾人は少なからずそれに就て尙考察を要するものがある。

而て先づ第一に考へざるべからざるものは聖淨二門の問題である。然らば吾人は如何に此の問題を考ふるか、それは先づ此の聖道對淨土の二門對立の考へである。而て一方に聖道といひ淨土といふに其の言葉はこれ對立の言葉ではない。聖道とは淨土に對する言葉よりも寧ろ聖道ならざる邪道若は外道に對する言葉であつて、淨土の道又これ聖道なりと云ひ得べきである。而て淨土といふ言葉も亦聖道門と對立すべき言葉ではない、寧ろ穢土に對立すべき言葉であらう。而て聖淨の二門を此土入聖彼土往生の二門と分ち。此土と彼土、入聖と往生と分別し、又娑婆と淨土、自力と他力の宗敎的關係に分つことも果してどこまでが眞實の分子であらうか之又一段の熟考を要することがらである。

然らば如何にして往生思想が聖道門と竝び顯はれて來たのであるか、吾人は暫く其の是非を論ぜずして其の成行きから調べて見やうと思ふ。さて世間の人々は他力淨土の法門を恰も非社會的非現實的非人格的宗敎の如くに誤解せる向きもあるが夫れは未だ眞實淨土敎の正しき發生の芽生を知らないから來る誤まつた觀察であつて反つて眞實の淨土敎こそは最も社會的現實的而も最も進步した人格主義的宗敎たることを示すものである。而て之を知るには如何にして聖道門的自力の修行思想から他力門的淨土往生の思想に展展して來たかを見るより明かなるはない。而て聖道門より淨土門に至るの展開は成佛の目的に於ては兩者同一であるが其の成佛の方法に於て自力修行と他力往生との相違がある。而て此土成佛の方法は前にも云へる如く大小顯密の聖道門に於て一として戒定慧の三學を離れて正覺を得るの道はなく何れも自力修行を主としたる法門である。然るに未だ宇宙の本心に吾人が合一せない限り一切所作か如來の戒律に一致する理りなく、持戒堅固ならんとするも恐く身心動亂して三昧の現前することはない而も三昧現前せざれば到底眞實の佛智も開顯せられるものではない。從て三學茲に成就せず、三學成せざれば成佛なる無し、成佛ならざれば解脫ならず、解脫ならざれば生死流轉を免かるゝことはできない生死流轉を免かるゝことができ無いならば如何でか眞實の人生の苦難を逸がれることができやう。而て若し人生の苦難が逸れることができないとしたならば自力聖道の法門は全く人類の宗敎として其の存在の價値だにないことに成る。而も尙飜て持戒そのものゝ本質を考ふるに凡そ持戒とは何を意味するか、そは人類としての正に爲すべき道そのものである。然に人として其の爲すべき道とは何であらうか之を要

するに夫れは天地の大道に反かぬ人としての行爲である。乍然吾人が未だ充分に自己の修養の積まない限り果して幾何の私利私欲を離れて自然の大道に合一した行爲が成立ち得やう。而てそこには宇宙の大道に一致して初めて眞實の人生も成立し得るといふ說と又一面には眞實の人道に一致することによつて初めて宇宙の大道にも合一し得るとの兩說がある。乍然如何にして此の兩者の一致を滿足すべきであるか自分の智慧を研いて天地の大道を極め其の極めたる所に從つて宇宙の大道を行ふといふことは言ひ易いことではあるが靜かに自分の行爲を顧みるとき吾人は果して其の滿足の行爲を遂行しつゝあるや否や凡そ人として向上の心なき人は止む、乍然若し少しにても眞實向上の心あらん人々は如何でか今日の如き現狀で眞に滿足し得るものがあらう。況んや一度人類生存の本義に目覺め、少しにても人類生活の價値の向上に自らを生かさうと自覺する人々にあつては到底今日の如き生活の有樣では滿足せらるべきものではない、而てそこには永遠の生命と無限向上の光り輝き、永劫不死なる人類の理想を現實日常の生活の上にも充分に肯定せなければ到底止み難いのが人類の要求である。實に『人はパンのみにて生くるものにあらず唯神によつてのみ生くる』の世界である。而て如來の世界とは即ち此の靈光の世界である人類の行くべき宇宙の眞善美聖の世界こそは人類の正に往くべき最高の理想の生活である。而て斯くの如きの世界こそ實に神の世界、即如來の世界であるが又直にそれが吾人々類の住すべき眞實の世界でなくて何であらう、そこには神の世界と人の世界とは一である。神の世界が直に人の世界そのものであるのである。

乍然斯くの如きが人類の世界であり、如來の世界であるとしながらも、吾人々類の實際生活は如何であらう、そこには實に驚くべき人類生活の淺間しき貪瞋邪惡の私利爭鬪が日夜を別かず行はれてゐるではないか、世に生存競爭、弱肉强食の獸的生活は昔も今も變りは無い、唯一時平和快樂に見ゆる人々の生活も一度自分の損失となるならば千年の知己も萬年の友も直ちに相反の仇敵となる。加之たまたま獨り淸がらうとあせつて身自らに修養足らずして心は常に毀譽褒貶に左右せられ、外面は無慾を粧へども內心は貪慾以て飽くことを知らない有樣である。而て斯くの如きは獨り吾人ばかりではなく、到る處皆これなるかの感がある。言は易く行ふは難しとは今も昔に變らない事實である。乍然かくて吾人は果つべきか自から努めて得ざる所、そこには如來他力の本願によるより外には道がないことになるのである。而て斯の如きを厭離穢土欣求淨土といふのであつて、又止むを得ないことであり。又眞に道を求むる人々の更らに當然な道ゆきといはねばならぬ。（一九二三、八、一六）

懺悔錄（其十七）

演阿彌

如實に信順し如法に歸命する赤子の聲に、大なる慰安と溫き抱擁とを惜み給はざる唯一の如來樣よ、如來樣と私とは元と一體であり今も亦た恒に一體で在しまし給ふものを、私の心至らずして小自我相に執着して間に一重の垣根を築き自ら巨りを置かんとする事は、實に愚にも亦た拙き極みであります、此夜寢る少し前にこの樣な私の信仰の不徹底を上人に訴へた時、上人は靜かに

『今まあなたが信じて居る所の佛は法身であつてまだ報身の如來でない樣に思はれますがどうですか』と尋ねられましたので私は少からず、迷路に這入り而して一の大きな煩悶の底に沈んで仕舞ました、

『私に直觀せられ信ぜられ而して又た慕はしく思はれて在しまし給ふ如來樣はよし理論的には法身の樣であらう共、直觀と感情の上には人格として、より外には感ぜられ得られない、此人格欣慕の信念が法身への夫れであるのだらうか將又報身への夫れではないのであらうか、私にしては唯だ單に如來樣とより外には感ぜられ得られないのである、然し上人がかく云ふからには何か其處に依り處があるのではなからうか、私自身に氣付き能はぬ缺陷があるのであらう、若し缺陷ありとすれば夫は如何なる點にあるのだらうか。其缺陷が充足せられざる限り私の進歩其物の上に萬一大なる支障を來たすとすれば實に重大問題である。……』煩悶は夫から夫へと一つ事が繰返し繰返されて遂當朝迄マンヂリともする事が出來ませんでした。朝になつて私は考へました、『こんな問題に迷つて居つてはならぬ、要するに私には何等の力も有りはしない唯だ無力無智なるが故に如來樣に一心に御願するのである、噫、如來樣よ、どうぞ私に眞實を與へ給へ』かく祈り而してサラリと此問題を捨て、仕舞ました。私はもう眞劍です。死に物狂ひです。此日念佛中、廣き曠野に出てたり又は天空に逍遙したり青色あざやかなる棗の木と葉との動かかざる相に眺め入つたりして居りましたが、こんな物に惑はされる樣な私ではありませんでした、翌れば時維大正九年七月廿八日午前八時過ぎ處は信州唐澤の阿彌陀寺に於ける三昧道場、一心に御念佛して居る時、周圍の凡ては空じ去つて唯だ茫々然たる御念佛のみになつて居る私がありました凡そ二三十分も過ぎた頃、また夫れさへも盡き果て空々漠々たる事多時、忽然として現前したのは大さ一丈もあらんかと思ふ斗りの大きな菊の花であります、白桃色の管辨青綠色の萼なぞ夫れ夫れの色に夫々の光ありて其美しさ本當に譬へ樣もありません。『猶如日輪住其人前』とは此事でせうか見惚れ果て、暫くは唯だ其美に醉ふて居りました、駄目ですねそんな心では。然しやがて夫も消ゆるともなく失せて仕舞ふとスッカリ死に果て死に切つた狀態が暫く續いて居りました。此時間が凡そどの位ありましたでせうかサッパリ判りません、が、兎に角身心脫落脫落身心大死一番底の無念無想其物であつた事は事實であります。……北時です。私はハタと實に實に驚く可き私を發見致しました。夫は私が私の儘に驚く可き南無阿彌陀佛の稱名其儘に成り切つて居たからであります。而も夫は『おう如來樣が……』と叫ばざるを得ぬ處の駭絕驚絕の一大不可思議事實であつた事です。見よ。自性淸淨の天地は照々靈々として澄明に純淨に盡十方法界を遍く照らし渡つて居ります。然かも其中心には一心に南無する私があり更に森嚴神妙の威神と豁々として鳴る溫き慈愛とに充滿ち給ふ處の『見わざる如來樣』が嚴臨し給ふ。私が南無阿彌陀佛か、南無阿彌陀が私か。否な否な南無阿彌陀佛其儘が如來樣の御からだ其儘なのでありました。噫、一塵の曇もなき眞如心鏡の月か將た又獨朗淸澄の天眞如來か意識に絕し思慮に絕して獨了々たる人格の世界、然も充實せる南無と其南無の全識神を抱擁する溫き愛とは報身如來の顯現か。宙宙全體は如來であり然かも其如來は宇宙の中心に立ち給ふ。宇宙全體は天眞自性であり然かも其中心核をなすものは此の愚かなる私であります。げに何と云ふ不可思議實に何と云ふ神秘でありませう。驚く可き主觀に

して然かも驚く可き夫觀であります。全卽一。一卽全。絶對卽相對。相對卽絶對。まあ何と云つよいでせうね。とてもとても筆や口ではよく言ひ現はす事は出來ないのであります。故辨て榮上人樣は念佛三昧靈光三昧と云はれましたが本當にさうだと思ひます。嗚呼。妙なる哉。妙なる哉。念佛は嚙みしむれば嚙みしむ程深い深い味がある樣に思はれます。私は唯だ其僅か斗りの味に觸れたのに過ぎません。否な唯だ驚いたのに過ぎません。然し私が今其僅か斗りの經驗を事々しく並べ立てました事に就ては誠に道友の皆樣に對して申譯のない事であると存じて居ります。けれども事茲に出でた所以は私達の信仰は決してかくの如き神秘境に止まる者に非らず正に實現に卽したる理想實現の活天地に進む可き過程としてのみ許さる可き物である所の一材料として其經驗の內容を公開致しましたのであります。其事は私の信仰第三期の處に於て申し上げたいと思ひますから今は略しますが、世間往々にして幻影的見佛を以て信仰の極地の如く云ひふらして居る者のありと云ふは眞に情ない事だと思ひます。實に人を毒し純信仰を毒する處の隱沒正法の極惡人ではないでせうか願くは如來樣よ、如此人をして一日も早く反省せしめ而して如來樣の正しき信仰に入らしめ給へ偖て私はかくの如き驚きの中に少しの時間を經て元との散心の狀態になりましたが

『おゝ見佛とは此の事だ』

と誰に質さず共ハッキリ過ぎる程ハッキリした解決を得たのであります。然し今になつて見ると之も亦低級たるを失ひません。私は見佛に四階ありと思ふ者でありますが今申上げますまい。かくて一日二日三日と進むにつれて一方に上人の御講話は日を追ふて益々秋霜峻烈のするどさを增して實に密に入り細に渡つて私達の自覺を促がし而して上人自らの自覺をも語られました。獅子吼無爲の說百獸之を聞いて皆惱裂すと永嘉大師が謠つて居ますが宛然此時の事の樣に思はれます。其高遠なる其偉大なる實に實に驚歎置く所を知りません でした。おう偉大なる大自覺よ。何と讚美し何とたゝねる可きでせう !!。 噫々。靜かに私自ら私

自身を觀ずるに、我と執るべき我もありません。萬法は空々として自他無分別唯だ一如平等の相が各々時處位を異にせるのみではありませんか。私は私自らの私であると同時に私自らのみのではありません。隨つて他は亦た自の他に過ぎませんから私は私の立場に於て自他共通の眞實が体現せられなくては何等の存在の價値を認められません、言ひ換れば私は私自らに於て何處迄も眞實なる私でなくては到底私自身の存在を私自身に喜ぶ事が出來ないのであります。此故に私の改頭換面たる私の所有周圍の改善の上に痛切に祈らるゝ時、自利眞實卽利他眞實の有所得にして然かも無所得なる無作の大行が發起せざるを得ない狀態に導かれました。是れ私の入信第二期に於ける最初の自覺でありますし然し乍ら上人のあの大なる自覺に比ぶる時我自ら我身の弱少が思はれます。上人の說く處は南無の完成たる一超直入如來地てふ南無佛成佛、頓中頓の純信仰でありますのに私達のはともすれば如來樣の大慈悲他力を少さく見て何だか我が力で我自らが唯だ如來樣に助太刀されて行く如く思ふ所の漸進的信仰であつたと云ふ事は實に實に未だ如來樣の大慈悲に徹し得ない證據であらねばなりません。あゝ如來樣よ、本當に濟みませんでした、本當に申譯がありませんでした。然し乍らまだ私には大自覺が起り得ませんけれども私も亦た如來樣を中心生命とする限り必ずや近き將來に於て其信仰の極地に到達し得る事を覺悟致しました。否な到達せずには置きません。噫々廣大にして而かも無量無邊なる如來樣よ。今私が少くとも如來樣御姿の一部分を發得致しました事は私に取つて眞に終生忘る事能はざる一大革命であります。『御名を呼ぶ聲に心の雲晴れてさやかに見ゆる月の面影』『南無と呼べば彌陀は來ませり一つ身を我とや云はん佛とや言はん』『唱ふれば佛も我もなかりけり南無阿彌陀佛々々々』此の三は集つて私の念佛所感の全体を說明して與れて居ります。私も亦後に下手乍ら此事を歌つて見ました

『是心是佛是聲作佛ぞ遍照の南無阿彌陀佛々々々』然乍ら何日になつたら理想實現の日の來る事ぞ

土屋觀道兄に寄す

――魂の交り――

金子白夢

我が主基督は『汝等光のあるうちに光を信せよ』と仰せになりました。これは勿論當時の人々に向つて基督が、御自分の『光』であることを御示しになり、彼が地上生活を續けて居る間に彼を信せよと云ふ御言葉でありました。『光を信ずる』といふことは單に或る限られた時間内のことではありません。然し主の御精神は與へられた機會に新らしい眼を開いて『光』を体得した我に來れと云ふ尊い御言葉であつて見れば、それは誠に有り難い御言葉として御言葉として御受けをせねばならぬことであります。親鸞も其の『敎行信證』の序文のなかに於て、『あゝ弘誓の强緣は多生にもあひがたく、眞實の淨信は億劫にも獲がたし。たま〳〵行信を獲ば遠く宿緣をよろこべ』と仰せられ、道元も其の『正法眼藏』中に『人身得ること難し、佛法値ふこと希れなり。今我等宿善の助くるに依りて已に受け難き人身を受けたるのみに非らず。遇ひ難き佛法に値ひ奉れり　生死の中の善勝最勝の生なるべし　最善の身を徒らにして露命を無常の風に任すること勿れと仰せられて居ります。本當に宿緣と云ふものは不思議なものです斯うして私がこゝに書かせて頂くと云ふことが何と云ふ不思議な御緣でせう、三四年許り以前に私共が當地（名古屋）に文化講座と云ふものを開いて毎週哲學や文藝や宗敎などの研究會やら講演會を開き時々宗敎座談會などを開いて居つたのであります。或る夜宗敎座談會を開きまして一夕土屋觀道兄の御話を承つたのでありましたが、其の時の土屋兄の御話に對して私が反對意見を申上げて互に議論を闘はしたことがありました。それが御緣となりまして其の後土屋兄には態々拙宅まで御訪ね下され、一夜御互にしみ〴〵と心の深い辿りを語り合つたことでありました。それからと云ふものは何だか土屋兄の信の辿りがそつくり其儘私のそれと同じ響きを有つて居るやうに感ぜられ信仰上の交りと云つたやうなものが次第に深まりつゝ來たと云ふやうな譯であります。

私は能く考へます、私共が斯うして此の地上生活に於て互に相會し相知り合ふと云ふことは何と云ふ深い惠まれた仕合せな事ではないかと云ふことをしみ〴〵と考へるのであります。許されて地上生活を現に續けて居るものが此の地球上に其の數十五六億もあると云ふ其の中に斯うして一度でも御互に相語り合ふと云ふ機會を與へらるゝと云ふ事は幾人あるでせうか、十五六億の何萬分の一にも足らないことでせう神は私共にさうした少數人々を與へ給ふて互に魂と魂との觸れ合ふ機會を許して下さると云ふことは思へば思ふほど涙ぐましい恩寵と云はねばなりません。

『魂より魂へ』通ふ光のみが私の眞の生活の所有ではありませんか。其の他のものは唯だ斯うした生活を役立てると云ふ意味合ひに於ての外何等の意義があると云ふのではありません。『佛、佛念じ』合ふところに眞の宗敎があり、『神が神を識る』ところにのみ眞の生活がありとすれば、『知り合ふ』と云ふこと、『語り合ふ』と云ふことは私共の人生に取つてどれ丈け深い意味を有つて居ることせう。許された『聖徒の交り』と云ふ事は思へば思ふほど深い意味のあることであります。現に地上生活を繼續して居るなかに於てすら、私共の交りが限られて居るにも拘はらず唯聖徒の交りに於ては、如何に其の交りが廣く、遠く、遙かに遠く豊かに、心行く許りしみ〴〵と語り合ひ、親み合ひ、交り合ふことを許されて居るではありませんか、私に取つては斯うした交りのないところには眞の生活はありません、主基督が『我汝等を友と呼ぶ』と仰せられた御言葉に深く徹して見ると、そこには魂から魂へ通ふ尊い響きが流れて居るではありませんか、『正覺大音、響流十方』と云ふことがありますが豈たゞ正覺の大音のみが十方に響流する許りではなからうと思ひます、胸より胸に囁く此の愛の響き、魂より魂に通ふ此の宇宙的音樂の流れ、そこには渾融一如の境地が開かれて居ります『神と偕に』と云ふ心境がそこに如實に現れて居ります、

土屋兄が釋尊の宗敎意識の流れに尊いものを見ると同時に、基督の宗敎意識にも同じ尊さを見て

居らる、あの純眞な公平なずなほな態度に私は共鳴せずに居られません、世の所謂宗教家なるもの宗門の信仰を賣つてパンを獲んとする徒輩の稍々もすれば漫りに他を排して獨り自ら高うするものに反して、我が土屋兄の信仰の態度の何ぞそれ謙虛にして充實せる、私は斯うした意味に於て土屋兄のそれと同じ態度に於て、基督に親み、釋尊に親み、法然に、親鸞に、道元に、白隱に、ゝーガスチンに、アシシのフランシスに親んで居ります而して斯うした私の古聖との交りは、私の魂を深め、私の信仰を高めて、宗教生活の幽奥な體驗を日毎夜毎に私に與へてくれて居る事を自覺せずには居られません、そこには何等の衝突もなく、矛盾もなく、排他もなく、讒侮もないのです、一切は圓かな一つリズムのなかに躍つて居るのであります。

新らしい時代が今や私共の脚下を見舞つて居るではありませんか、時代は一切の因習附けられた古いきづなから脫却して解放されて、互に手を取り合ふて地上天國建設の大事業に從事すべき時ではありませんか、何を苦んでか互に惡み合ひ、拒み合ひ、退け合ひ、陷れ合つて斯の大なる時代を忘れ去るべきでせう、御互は眞に『友』となり『同朋』となつて精神界のだめ手を取り合ふて働くべきではありませんか、

土屋兄の新らしい仕事の試みは眞に時代の精神を得たもののみならず、これこそ眞の宗教運動であり、又祖師の遺志を十分に發揮する道であらうと思はれます、新らしい試みには新らしい危驗が伴ひ易いことは御互に反省せねばならぬ事であります、私は今茲にその方面のことをかく餘裕を持て居りません、今はただ私共が眞の友として、純一に、眞摯に、眞劍に、宗教界のために正しい道を開いて行かねばならぬ、斯くあつてほしいと云ふ希望を述べて置くに留めておきます。

我が尊敬する土屋觀道兄の事業の上に神の祝福の豐かならんことを祈つてをります　八月十九日

◆諸者の方へ

眞生誌料未納の方は急ぎ振替へで御送金願上ます　眞生社

唐澤の信念

（久我尾正治氏より）

△三千餘尺の雲の上に親しみ深き先輩は深く深く本質に喰入つて居られる事を思ふ時何で私は下界に斗り執着して居られませう、

△遙かに憧がれる世界が、天の一方から三十有余の道友が絶叫されて居る其聲に展開されて來る事を思ふ時、清水の天地、教は僅少なりと雖も敢て唐澤に劣らざる叫びのある事を思ひ下さい、

△み佛の世界に單に融合するを以ての念佛の時代は過ぎ、又まぼろしと見れば見得べき程度の見佛の世界も過ぎて今や正にみ佛の大理想實現に活躍せんとする潑溂たる元氣の念佛は天地をして六種に震動せしむるの慨があります、

△ビリリッと來る靈体に南無と念ずる一念はみ佛夫れ自体であると云ふ確信は誰が何と言ふとも動きません。

△唯だ數日數夜打ち通し凡ての環境を去つて靈感に浴しとほす三昧會に參加の出來ないのを遺憾に思つて居ます、

△秋風枯葉を鳴らす頃になれば中地の凡夫も引き締る、噫、三千余尺の秋の氣分、定めて靈氣漲つて居る事と思ひます、緊張したる道友の先輩諸君の上に大自然の惜まず惠まれて居る事を思ひつゝ合掌するのみであります　（下略）

信州唐澤ニテ演阿彌

◇吾朋便り

震災に就て　土屋　觀道

今度の震災は實に千古未曾有の災害でありました全市の四割四分を燒失したとの事です、大體の事は已に新聞や雜誌で御承知の事でせうから申ません。我が光明會員の中にも三十餘戸の類燒者がありました、乍然幸にも一人の死傷者も無く一層慈光裡中の生活に生々として活動してゐられますから御安神下さい、眞生社の方と神田の教壇は全々丸燒けでした、從て折角の骨折りで出來上つた尅氏の圖書館も自由倶樂部も眞生社も全く類燒したのです。芝の學寮が不思議にも東隣と北隣まで燒けたのに一つ燒け殘つたといふことは全く奇蹟です、眞生社も一時寮の方へ移すことにいたしました、眞生の九月號は印刷した處を製本屋で燒失しましたので休刊にしました十月號の遲れたのも此際御宥恕下さい。

九月號の分は何かの方法で補增のつもりです、尙皆樣の中で御見舞狀や御見舞の金品など頂戴いたしました事は心から深く感謝いたしてゐます、實は一々書面を以て御禮申上るが本意でありますが何分とも此際の事ですから誌上を以て御禮申上ます、御厚志のほどは一々親しく御目にかゝつた嬉しさと喜びとを以つて深く衷心から感謝いたしてゐますから右重ねて御了承のほどを願上ます、尙今回の震災に就ては罹災者同朋の慘狀を見るにつけても全く悲痛の感であります、私も共に燒かれてゐたならと反で自ち燒けなかつた事が同朋に對してすまぬ心さへしてゐます、（一〇一五）

○清永　實相寺樣より

一切時一切處變る心なきものを唯だ已が心の眞摯ならざるをのみ憂いとぞする、此度の別時會之を最後の唐澤ぞと心を眞劍に覺悟せしめしもやはり生溫き心ぞ惡くし來年も再來年もとのゆるみ出でゝいづくまでも不徹底に了らんとす是何者ぞ覺悟はあれど力足らず願くは上人の如き大自覺を我にもと思へど未だ時節ならじ噫々我は終に菩薩乘か？

○岐阜　大野顯道樣より

合掌一ヶ月餘りの傳道を終へて無事昨夜歸國はいたしました、敎へられる事ばかりで又その上自分の缺點が一層明瞭になつた事が何よりの獲物でした其後奧樣の御病氣は如何で御座いませうかどうぞ御自愛下さいませ。

◆誌代拂込芳名

○五圓六拾錢浦賀眞福寺樣○參圓永地待枝樣渡部眞戒樣桑名光德寺樣○貳圓百々治之助樣川村觀龍樣古座谷武兵衛樣黑岡仁太郎樣石渡勇樣吉田富太郎樣○壹圓五拾錢横内淨音樣○壹圓小川廣雄樣竹內倉吉樣藤原玉江樣長谷川嘉兵衞樣指田常子樣安達光太郎樣松本義一樣清水俊治樣土屋善之助樣○六十錢野村佐一郎樣猪狩敎子樣○貳圓林金三郎樣○壹圓山田觀月樣

定價一部十錢　半年六十錢　一年一圓
振替口座東京四七二八八番　眞生社
東京市芝公園第十四號地九番
編輯兼發行人　土屋觀道
東京市芝公園第十四號地九番
發行所　眞生社
東京市芝區三田四國町二番地三號
印刷人　三井清次
東京市芝區三田四國町二番地三號
印刷所　玄々堂印刷所

大正十一年二月二日第三種郵便物認可大正十二年十月十九日印刷納本大正十二年十月二十日發行（毎月一回一日發行）第二卷十號

九月號の分は何かの方法で補增のつもりです、尙皆樣の中で御見舞狀や御見舞の金品など頂戴いたしました事は心から深く感謝いたしてゐます、實は一々書面を以て御禮申上るが本意でありますが何分とも此際の事ですから誌上を以て御禮申上ます、御厚志のほどは一々親しく御目にかゝつた嬉しさと喜びとを以つて深く衷心から感謝いたしてゐますから右重ねて御了承のほどを願上ます、尙今回の震災に就ては罹災者同朋の慘狀を見るにつけても全く悲痛の感であります、私も共に燒かれてゐたならと反て自ち燒けなかつた事が同朋に對してすまぬ心さへしてゐます、（一〇一五）

○淸永　實相寺樣より

一切時一切處變る心なきものを唯だ已が心の眞摯ならざるをのみ憂いとぞする、此度の別時會之を最後の唐澤ぞと心を眞劍に覺悟せしめしもやはり生溫き心ぞ惡くし來年も再來年もとのゆるみ出でゝいづくまでも不徹底に了らんとす是何者ぞ覺悟はあれど力足らず願くは上人の如き大自覺を我にもと思へど未だ時節ならじ噫々我は終に菩薩乘か？

○岐阜　大野顯道樣より

合掌一ヶ月餘りの傳道を終へて無事昨夜歸國はいたしました、敎へられる事ばかりで又その上自分の缺點が一層明瞭になつた事が何よりの獲物でした其後奧樣の御病氣は如何で御座いませうかどうぞ御自愛下さいませ。

◆誌代拂込芳名

○五圓六拾錢浦賀眞福寺樣○參圓永地待枝樣渡部眞戒樣桑名光德寺樣○貳圓百々治之助樣川村觀龍樣古座谷武兵衛樣黑岡仁太郎樣石渡勇樣吉田富太郎樣○壹圓五拾錢横内淨音樣○壹圓小川廣雄樣竹內倉吉樣藤原玉江樣長谷川嘉兵衛樣指田常子樣安達光太郎樣松本義一樣淸水俊治樣土屋善之助樣○六十錢野村佐一郎樣猪狩敎子樣○貳圓林金三郎樣○壹圓山田觀月樣

定價一部十錢　半年六十錢　一年一圓
振替口座東京四七二八八番　眞生社
東京市芝公園第十四號地九番
編輯兼發行人　土屋觀道
東京市芝區三田四國町二番地三號
發行所　眞生社
東京市芝區三田四國町二番地三號
印刷人　三井淸次
東京市芝區三田四國町二番地三號
印刷所　玄々堂印刷所

大正十一年二月二日第三種郵便物認可大正十二年十月十九日印刷納本大正十二年十月二十日發行（毎月一回一日發行）第二卷十號